

---

# 意外な名コンビ

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意外な名コンビ

### 【著者名】

コーリ

N5887A

### 【あらすじ】

ある日の休日、富本由美は気晴らしにコナンを誘う。そこからハプニングが始まった。

「」は警視庁の女子寮。今、1人の婦警が目を覚ました。

宮本由美

「ふああ・・・」

彼女の名前は、宮本由美。警視庁捜査一課の交通課に勤務している婦警である。

いつもなら、駐禁やらスピード違反やらで取り締まりに駆り出される忙しい毎日なのだが、今日は日曜日で、久しぶりに非番だった。

由美

「あーあ、ヒマだわあ・・・そつだ、美和子をカラオケに誘つてみよー!」

由美は同僚で親友の、佐藤美和子にメールをしてみた。

しかし、数分もしないうちに断りのメールが返ってきた。

由美

「ああ、そういうえば、美和子今日は高木君とデートだつたっけ・・・恋人同士の甘い一時を邪魔するワケにはいかないか・・・」

そう思った由美は、私服に着替えて部屋を出た。

由美

「」なつたら、あの子達の中の誰かを誘つてみよう!」

あの子達とは、もちろん「ナン達少年探偵団」の事である。

由美は、一件一件まわってみた。

しかし、歩美は母親と買い物で、元太は酒屋の手伝い、光彦は勉強で、断られた。

由美は続いて、阿笠邸に行つてみた。

哀

「ゴメンナサイ、今田はちょっと研究があつて……」

哀にまで断られた。

由美

「ハア……私つて、人望ないのかなあ……そんなワケ、ないない！」

由美は負けじと、最後のメンバーの所に行つた。

毛利探偵事務所

コナン

「で、結局最後にボクが残つたってワケね・・・」

由美

「そうなのよ・・・でも、コナン君も忙しいわよね・・・」

コナン

「ボクはいいよ！行つても・・・」

由美

「ホント？」

コナン

「うん、一度由美さんともじっくりお話がしたかったんだ。」

由美

「あ、ありがと・・・（うーん・・・確かにコナン君つて、美和子が言つてた通り大人びてるわね・・・そりいえば、哀ちゃんも大人びてるつて高木君が言つてたっけ・・・コナン君と哀ちゃんつて、何か秘密の関係があるのかも・・・よし、今日はコナン君の監視をしようー！」

喫茶店

由美

「さあ、今日はお姉さんのおじつよー何でも注文していいからねー。」

口ナン

「えと・・・それじゃあ・・・チヨ ハニー ケーキとアイスコーヒー  
ー・・・。」

由美

「わかったわー店員やーんーチヨ ハニー ケーキひとつと、アイスコ  
ーヒー二つー。」

「かしこまつました。」

数分後、アイスコーヒーとチヨ ハニー ケーキが運ばれてきて、口  
ナンと由美は話を始めた。

由美

「で? 口ナン君。彼女との関係はどうまで進展してるので?。」

口ナン

「彼女って?」

由美

「またまたあ、トボケちゃつてーー。娘ちゃんの事よー。」

口ナン

「なつ・・・」

コナンは、赤面した。

コナン

「な、何言ってんですか由美さん！…」

由美

「隠したってダメよ！私はいつもあなた達2人を見てわかってるんだから…」

コナン

「うう・・・」

コナンはどんどん顔が真っ赤になっていく。

まさ」「、コトダム。

コナン

「か、からかわないでくださいよ…！」

コナンはもう、冷静ではなくなっている。

由美

「モテモテねー、コナン君ー！」

コナン

「え？」

由美

「蘭ちゃんに聞いたわよー幽霊船の事件の時には三上鈴ちゃんつて子にくつつかれてて、旅芝居一座の時にも女の子になつかれてたそうじゃない！」

コナン

「・・・」

コナンは、無言でアイスコーヒーを飲み、チョコレートケーキを口に運ぶ。

由美はそんなコナンを見て、クスクス笑った。

由美

「（からかいがいがあるわよねー、コナン君つて・・・）」

コナン

「（まちがいない・・・由美さんは園子以上に人をからかうのが好きなんだ・・・）」

しばらくして、2人は食事を終えた。

由美

「じゃあ、コナン君、出ようか。」

コナン

「うん。」

支払いを終え、コナンと由美は喫茶店を出た。

由美

「コナン君、次、どこに行きたい？」

コナン

「そうだね・・・」

その時、コナンと由美の前を一人の男が通り過ぎた。

由美

「あーあの男、どこかで見た気がするんだけど・・・」

コナン

「うん・・・例の逃走中の麻薬の運び屋なんじやないかな?」

由美

「よし、コナン君! 私達2人で、あの男を尾行しましょ!」

コナン

「ええ! ?び」・・・」

コナンが叫ぶ前に、由美が口を塞いだ。

由美

「ダメよ、コナン君。大声出したら聞こえるでしょ?」

コナン

「そ、そだね・・・」

由美

「 ゆっくつ尾行するのよ・・・」

コナンと由美は、男の尾行を開始した。

男が小走りに歩き、その後ろから、コナンと由美が彼を尾行している。

コナン

「 アジトを何としても突き止めなきゃね・・・」

由美

「 そうね・・・でも、そのアジトに仲間がいたりまじめやつへ。」

コナン

「 その時は、また考えるよ。」

男は、尾行しているコナンと由美に気がついたらしい。

携帯電話を取り出すと、早打ちで誰かにメールを打った。

『 刑事らしき女と、その助手らしきボウヤがオレを尾行中。アジトに着いたら、よろしく。』

男はパチンと携帯を閉じると、また少し小走りになつた。

コナンと由美は、男を見失わないのでついていった。

しばらくすると、駅は山中の廃屋にたどり着いた。

その後ろの木に、コナンと由美が隠れている。

由美  
「コナン君、いつ出るの?」

コナン  
「もう少し待つて! ヤツが中に入るまでは・・・よし、入った! 行くよ、由美さん!」

由美  
「うん・・・」

コナンと由美は、廃屋の中に入つていった。

由美  
「さて、入ったのはいいけど、どこに行けばいいのかしら・・・」

コナン  
「あ、これ見て、由美さん!」

由美

「床に矢印がついてる・・・」

コナン

「これをたどればいいのかな?」

由美

「さつとわづよ、行きましょー。」

コナンと由美は矢印をたどり、ある部屋に入った。

コナン

「ここは、いったい・・・」

その時、扉がバタンと閉まった。

由美

「え!？」

コナン

「しまった!これは罠・・・」

不意に、下から何かが入つて來た。

シュウウウウ!..

由美

「うう・・・」

由美がドサッと倒れた。

「ナン

「ゅ、由美さん！一ダ、ダメだ！これはクロロホル・・・ム・・・！」

コナンも、薬を吸い込んで氣絶してしまった。

由美

「コナン君一起きて、コナン君ー！」

「ナン

「え・・・？」

由美に声をかけられ、コナンは目が覚めた。

「ナン

「う、ううは・・・？」

由美

「どうかの一室みたいよ・・・」

「ナン

「ボク達、閉じ込められたのか・・・」

由美

「うん、それもやつかいなオマケつきでね・・・」

コナン

「！」

コナンは体を縄で縛られ、由美とつながっていた。

由美も、体を縄で縛られている。

コナン

「縄でつながれてる・・・簡単には外れそうにないね・・・」

由美

「油断したわ・・・コナン君、どうしよう・・・？」

コナン

「シツ、黙つて！何かの会話が聞こえてくる・・・」

由美は壁に寄りかかり、コナンは由美の方に体を倒して、2人は気絶しているフリをした。

すると、数人の男が部屋に入つて來た。

「まだ眠つているようだな・・・」

「ああ、クロロホルムの威力は高いからな・・・」

「「」の2人、どうする？」

「！」からズラかるまでは、せいぜいいい夢でも見ててもうれしい。  
・  
・

「悪く思つなよ、お2人さん・・・」

4人組は、部屋に力ギをかけて、出て行つた。

男達が出て行つた後、コナンと由美は田を覚ました。

由美  
「あの男達、私達を殺す氣なのかしら？」

コナン

「たぶんね・・・アジトを見つけられた口封じつてとにかくかな？」

コナンの冷静な言葉に、由美は唖然となつた。

由美

「私・・・まだ死にたくないわ・・・コナン君、どうしたらいいの。  
・  
・  
？」

由美は、涙声になつてゐる。

コナン

「泣かないで、由美さんーアイツらはボク達が絶望したと思つて油  
断してゐ・・・脱出するなら、今だよ・・・」

由美

「でも、どうやって脱出すれば・・・」

コナン

「まあは、」の繩を外さなきやね。」

由美

「コナン君、外せるの?」

コナン

「うん、とても軽くつないであるからね。」

コナンは、難なく繩を外した。

コナン

「由美さん、何か切れる物持つてない?」

由美

「ソーリングセットのハサミなら、私のバッグに入ってるけど・・・」

「

コナンが辺りを見回すと、壁の方に由美のバッグがあつた。

コナン

「わかった、取つてくるね。」

コナンは走つて、バッグを取りに行き、バッグを後ろ手に持つて戻つて來た。

コナン

「よし、」のハサミで繩を・・・

「ナンは後ろ手にハサミを持ち、後ろを確認しながら由美の縄を切った。

バサツ・・・

由美

「ありがと、コナン君ー。コナン君の縄もすぐほどくね。」

由美はコナンの後ろに回ると、コナンの縄を切った。

バサツ・・・

由美

「ふう、苦しかった・・・」

コナン

「さ、早く逃げようー！」

由美

「そうね。」

コナンと由美は、部屋を抜け出した。

由美

「それで、脱出したのはここにナビ、これからどうするの？」

「ナン

「アイシーラを！」のまま野放しにしておくわけにはいかないよ。——網打刃にかかるなり、ヤシラが油断してゐる今がチャンスだ……」

由美

「でも、どうもひつて？」

「ナン

「ボクにいい考え方あるよ。」

数分後、男達が部屋に入つて來た。

「あ、アイシーラがいねえぞ……。」

「そんなバカな……ちゃんと縛つとこたはすなのに……。」

「まだこの近くにいるはずだ……。」

「取つ捕まえるぞ……。」

男達は、部屋を飛び出した。

「エリに行きやがった・・・」

「ナン

「エリたちだー」

「やうか、じつちか・・・」

「覚悟しやがれ・・・」

男達は、ある部屋に入り込んだ。

「あー」

「オマエらー！」

「ナン

「あ、見つかっちゃった・・・」

由美

「アハハ・・・」

「取つ捕まえるー！」

男達は、「ナン」と由美に飛びかかるとしたが・・・

「 プスッ！」

ドサッ。

「 あ、 おい！」

「 どうした？」

由美

「 今よ、 「コナン君！-！」」

コナンはキック力増強シユーズのスイッチを入れ、ドラム缶を蹴り飛ばした。

ドガアアアン！-！

「 がはつ！-！」

「 ぐつ！-！」

男2人が倒れた。

「 このガキ、ナメた事を・-・」

由美

「 ハアツ！-！」

ドツ！-！

「 がつ・-・」

由美

「ハアアアアーッ！！」

ヒコオオオオ・・・

ド「オー！！

由美の腹打ちとかかと落としで、男は床に倒れた。

「ナン

「由美さんー」

由美

「美和子に教わった護身術、少しば役に立つたわね・・・」

その後、オレと由美さんの通報を受けた刑事が到着し、男達は逮捕され、麻薬もすべて回収された。

そして由美さんは、寮に戻る事になった。

由美

「またね、「ナン君！今度会つた時は、哀ちゃんとキスする関係までいってるんだぞーーー！」

「ナン

「由美さん……」

由美

「じゃあねー……」

由美は、足早に駆けていった。

コナン

「由美さん……もひ……」

その回じ頃、阿笠邸では……

哀

「ち、ちがいますよ高木刑事！私と江戸川君はそんな関係じゃ……」

「

高木

「あれ？じゃあどうして赤くなってるのかな？」

哀

「うう……」

哀も、高木刑事にコナンとの関係を質問されてユーティダコになつていた……

(後書き)

その数日後、コナンと哀はウワサの原因を誰から聞いたのか2人から聞き出した。

由美「園子ちゃんよ」

高木「園子さんだよ」

そのあと、2人の怒りの矛先が園子に向いたのは言つまでもない。

コナン・哀「そ／＼そ／＼そ／＼ヤロオ／＼！…！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5887a/>

---

意外な名コンビ

2011年2月12日02時15分発行